

# 反障害通信

18. 4. 28

69号

## 障害学批判のために

つい最近、いろんな局面で「障害者運動」を担っているひとから、なぜ障害学をやっているのかという質問を受けました。また、長年「障害者運動」で関わっている「障害者」が、「障害学をやりたい」とか言い出しています。なにか、誤解が生じているようです。わたしは決して学問としての障害学をやっているわけではないのです。

わたしが2010年に『反障害原論—障害のパラダイム転換のために—』という本を世界書院から出してもらったときに、編集者から付けてもらった帯に、「障害学批判から運動のための理論を切り開く」という文言をつけてもらいました。

そもそも「障害とは何か」という問いを、わたしが発したのは、わたしが「吃音」という「言語障害」と規定される立場にあり、その障害がマージナルな障害で、自らが「障害者運動」主体となるためには、障害規定をはっきりさせ、自らを「障害者」として突き出すことが必要になったからです。というよりも、「重度障害者」が早々に開き直る地平を獲得するに比して、そもそも「マージナルな障害者」の特質として、「自らが障害をもっている」という、この社会の「障害の医学モデル」にとらわれて、自らの存在を否定的にとらえていました。優生思想へのとらわれから、自らの存在を抹殺したいとの思いにもとらわれていたのです。そこから脱するためには、「障害者」運動主体として自己定立ためには、「障害とは何か」という問いかけを必要としたのです。そのテーマはつねに「障害の否定性」の否定でした。これは、「障害者」が障害をもっている」として、あらわれてくる構造自体を批判していく」ということに帰着します。

なにかまた小難しいことを言っているととらえられるのかもしれませんが。

今、イギリス発の「障害の社会モデル」という考え方が、「障害者運動」を担うひとたちの中で広がっています。それを、少しアレンジして「障害とは、社会が「障害者」と規定するひとたちに造った障壁と抑圧である」という言葉であらわすことができます。「障害者が障害を持っている」という、それまでの医学モデルから、まさに真逆な提起に踏み出したのですが、パラダイム転換（基本的考え方の枠組みの転換）を為しきるのに、失敗しました。

今「障害者運動」は「障害者権利条約」の考えを軸に、挺に進められようとしています。その基本的理念が、結局医学モデルの枠組みから抜け出すことに失敗したのです。（註1）

そもそも、それ以前の、「障害者福祉」というより、福祉一般ですが、医学モデル—個人モデルにとらわれたところでありました。「わたしたちは困っています、助けてください」というようなところで要求（お願い）を出していきます。それは「恩恵としての福祉」の枠組みなのです。そこでも、福祉制度をそれなりにかちとってきたわけですが、そもそも

新自由主義的グローバリゼーションの進行下の福祉の切り捨ての中で、それではパイのぶんどり合戦になり、そんなところで、結局はほとんど得るものはないというところで、「恩恵としての福祉」ではなく、「権利としての福祉」を求めていく動きも出てはいたのですが（註2）、結局、そもそも権利論自体が、医学モデルの枠組みでしかなく、それでは「恩恵の福祉」に封じ込められていくということもありました。

権利条約も、結局医学モデルに収束されています。そのことは、‘障害者’ということばを英語でどう使っていくのかにもあらわれています。まさに「社会モデル」の発生の地のイギリスで使われている **disabled persons**（受動詞の形容詞的使用として、「できなくさせられている」という、「障害の社会モデル」的意味に近い使用）か、米語の **persons with disability**（まさに「障害をもっている」という意味になる医学モデルそのもの）、どちらを使うかで、結局国連——WHO関係では米語が採用されて、その時点で、医学モデルに収束され、「社会モデルは」敗北したということがあります。

それでも、現実的に使えることを使っていくという意味では、使えることもあるのですが、そもそも条約の条文には「漸進的に」という文言を入れ、さらに権利条約は「必要な援助」という言葉を退け「合理的配慮」などという「権利の制限」の文言さえいれていません。そもそも人権論自体が架空の理論です。さらに押さえておこなら、そもそも障害差別の土台には、労働力の違いによる差別という、資本主義社会における根幹的な差別があり、能力の違いによる区別は差別ではないとしています。このあたりは、女性学の金井淑子さんが、他の差別とは違って障害差別は性差別などとは違うというようなことを書いています。たしかに、この社会の原理に根ざしているというようなことで一理あるのですが、ひとこと書き添えておけば、資本主義社会の差別は、労働力の価値というところに収束される傾向を有しているのです。性差別の男性の女性に対する差別も、子どもを産み、授乳するというところで、労働の現場に集中できないとされて排除される、低賃金になるのですが、そもそも性分業や働き方の問題に起因することで、一つの錯誤です。（註3）

何が問題になっているのかを押さえると、そもそも能力を個人がもっているところから、「障害を障害者がもっている」という考えが出てくるのです。「えっ、なにを言っているのか」と思われるのかもしれませんが。ひとは歴史的社会的蓄積（註4）のなかで生きています。その膨大な蓄積のなかで、個人の能力差なることは0に近いもの収束します。数字的に仮にあらわしてみれば、1,000,000,001 と 1,000,000,0002 を区別する必要はあるのかということです。もうひとつ書いておけば、「もっている」ということで想起するのは、ある実体が属性をもっているという実体主義の問題です。そのことをマルクスの物象化論を発展的に展開した廣松渉さんが物象化論として、実体主義批判を展開しています。障害問題でいえば、いったいいかなることができないと「障害者」と規定されるのか、そもそも、ひとはひとりで生きていない、過去の膨大な蓄積と、現在の協働のなかで生きていのに、そもそもなぜ、ひとりでできないと「障害者」と規定されなくてはいけないのか、という問いにつながっていきます。

さて、わたしは最近『資本論』関係の本を読んでいます。マルクスの『資本論』を古典経済学—国民経済学の完成として曲解するひともいるのですが、そのサブタイトルは「経済学批判」です。あえて、大風呂敷を広げてそのことになぞらえて、わたしはわたしの障

害に関する論攷を、反障害論とも名付けたことを、障害学批判としても突き出しておきます。

#### 註 1

役人が障害者の権利条約を巡る法整備のなかで、法案の提出の際に、これは「社会モデルに基づく法律だ」とか言ったという記録(正確にいうと読んだ記憶で、きちんと探し出せていないのですが、それはまさに錯誤です。資本主義社会では、「社会モデル」に基づく法律は作り得ません。近代的個我の論理で資本主義は成り立っていて、それを突き崩す法律が採用されるときは、資本主義は崩壊するときです。

#### 註 2

そもそも人権論で解決できるなら、それで行けば良いのですが、そもそも権利というのは、排除のもとで成立しているという差別性の指摘があります。(本「通信」のブログ 438 の・熊野純彦『マルクス資本論の哲学』岩波書店(岩波新書) 2018)

#### 註 3

そもそも性差別は、私有財産制における財産の相続というところで、とりわけ女性を男が占有化し、自分の子どもを産ませるというところからきているという押さえ方もあります。その他、身分差別は私有財産制の相続というところでの家意識の継続という側面があります。民族・人種差別はかつての植民地支配、現代的にはグローバリゼーション下での格差の維持と拡大のなかで、それを合理化するために起きていること、それらのことも含めてその他差別も継続的本源的蓄積論という観点でおさえ得ます。

#### 註 4

蓄積ということは正の蓄積だけとは限りません。環境破壊という負の蓄積の問題も考えなくてはなりません。

(『反障害原論』への補説的断章 (26) としても)

(み)

## HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

◆「反障害通信 69 号」アップ(18/4/28)

◆ホームページのプロバイダーがサービスを停止することになり、ホームページをリニューアルしました。新しい URL は 2 P に載せています。リニューアルにつき、会の名称もきちんと「反障害—反差別研究会」に統一しました。また、この際に共同作業に踏み込もうと、入ってもらえる形で、会の方針とかも案ということで、提示しているのですが、こちらはなかなかうまく行きそうにありません。

◆「反差別資料室」という形で、もうひとつ HP を作りました。こちらには草案段階の文を載せていきます。また文献の整理もこちらの方でやろうと思っていますが、ちょっと本格的にやり始めるのには時間がかかりそうです。

◆「たわしの対話を求めて」というブログは読書メモ・映像鑑賞メモに純化しています。

## 責任をとらない「最高責任者」

ウソつき首相に付度して、官僚が記録がないとか、文書を破棄したとか、言っていたのですが、ないわけがないと書いていていました。やはり次から次に出てきています。森友、加計、南スーダン日報、イラク日報・・・、しかも、問題の財務省の次官のセクハラまで出てきていて、さらに、自民党議員のセクハラということを理解し得ない、議員としての資格さえ疑われるような発言まで出てきています。次から次に出てきます。なぜ、今の時期かということも押さえておかねばなりません。自分（たち）の党利党略で意味不明の衆議院選挙を昨年やり、しかも参議院選挙も統一地方選も来年です。今は、丁度国政選挙の谷間なのです。抑えきれなかった問題を出して支持率をさげても、選挙の頃には回復するという安倍政治の手法、いろいろ問題を起こして支持率を落としても、問題を先送りして、危機を先送りして、選挙にあわせて、人気取りの政策を出し、選挙制度が民意を反映できない中で、3分の2の議席を維持しつづけるという構図があります。

更にあきれたことには「うみを出し切る」とか言い出すしまつ、うみはそもそも安倍首相と安倍政治が造りだしたものです。「安倍首相がうみだ」という指摘もでています。

安倍首相は口癖のように「わたしが最高責任者だ」と言います。「最終的な責任はわたしにある」と断言します。意味が分からないのです。責任を語るのに、責任をとらないのです。不祥事が起きるときは、なぜ起きるのかということをしちんととらえ返し、二度と起こらないように態勢を整え直します。次から次におきるならば、もう自分には処理能力はないと、辞任して、後のひとに任せます。それが責任という言葉の意味です。そんなイロハも分からない者が政治家をやれるわけがないのです。

ほんとになんとしても、安倍政治を終わらせないと、もうどうしようもなくなりますーなんとしても一ほんとうみを出し切らねばなりません。

## 読書メモ

予告していた『マルクス資本論草稿集』の①②に収められている『経済学批判要綱』を読み、『経済学批判』の「序言」を読んで、廣松シェーレの熊野さんの『資本論』に関する分厚い本と新書の本を読みました。『資本論』とリンクする復習的なこともあったのですが、かなり厚い本が二冊あり（『経済学批判要綱』の二冊目と熊野さんの『マルクス資本論の思考』）、メモがかなりの量になり、しかもメモ、ちょっと、読者に読むに堪えない分量になってしまいました。読み飛ばして、なんとなく感じだけでもつかんでもらえればと願っています。

さて、これからが大変、熊野さんの参考文献に載っていた本や雑誌を入手したのですが、同じく参考文献にあった廣松シェーレの日山さんの本を読んでから、張さんのマルクスの本を読み、参考文献に載っていた本や雑誌に少しあたり、元の読書計画に戻り、革命史関係の本を読みます。その前に、障害学関係の英語の原典に手をつけなければならないのですが、何がなんだか自分でも錯綜してきています。ちょっと読書計画を整理します。

・カール・マルクス／資本論草稿集翻訳委員会訳『マルクス 資本論草稿集①』大月書店  
1981

もう何年も前から、マルクスでわたしが読み落としていて気になっていた論攷、「経済学批判要綱」がありました。別の版の「経済学批判要綱」を入手していたのですが、ネグリ／ハートの『マルクスを超えるマルクス』で、新しい編集版が出ているのを知って、入手していました。その新しい編集版は、世界的な規模で、マルクス・エンゲルス全集を編集し直そうという動きの中ででて来ました。読書メモのブログでもとりあげた佐々木隆治さんもそのプロジェクトに入っているようです。そもそも、大月から以前出ていた、『マルクス・エンゲルス全集』は、旧 MEGA と言われるようになり、新しく進む編集版を新 MEGA と呼ぶようになっていたのですが、そもそも旧 MEGA は全集ではなく、著作集ということで MEW とされるようになり、新 MEGA を MEGA と呼んで作業が進んでいます。で、新しい編集の中で、「資本論草稿集」が編集され、翻訳にこぎついています。最近、廣松シェーレとも交流のある、南京大学の張一兵さんが、立て続けに、『マルクスに帰れ』と『レーニンに帰れ』を出しました。で、『マルクスに帰れ』の中でも、この「経済学批判要綱」がとりあげられているよう、それで二重三重につながって、いよいよ「経済学批判要綱」にとりかかりました。

マルクスその「資本論草稿集」は書かれた年代順に並べられ、第 1 巻は「1957 年-1958 年の経済学草稿」となっていて、それには、「バスティアとケアリ」と「経済学批判要綱」への序説」と「経済学批判要綱 第一分冊」が納められています。第 2 巻には「経済学批判要綱 第二分冊」となっています。

2 巻を読んだ時点で、「経済学批判要綱」全体のコメントを書くことにしますが、ちょっとだけ感想を書いておきます。マルクスは青年ヘーゲル派として哲学的なところから出発して、経済学の世界に入り込んできたのです。そこで、『資本論』もまさに経済学的に展開しているのですが、この「経済学批判要綱」にはまだ哲学的な匂いが強いようです。このあたり、廣松さんのマルクス解釈とりわけ物象化論をマルクスからの拡大解釈というより、踏み外し的にとらえるひとがいるのですが、この「経済学批判要綱」を読んでいると、結構、マルクスそのものからのつながりをとらえられます。また、マルクスが未完のままにした『資本論』編集をエンゲルスがひきついたのでありますが、それがマルクスの意向にどれだけ沿っているのかが、この草稿集から読み取っていけるのではとも思います。そのあたりのこともやってみたいのですが、とても、時間がありません。この課題だけを出しておきました。

さて、第 1 巻の内容について少し紹介。「バスティアとケアリ」はマルクスが経済学を勉強する過程で読み、別な論攷を読みそれに関するコメントをする中で、出版化する必要はないとした論攷のようです。そんなこともあって、読み流してしまいました。「経済学批判要綱」への序説」は、岩波文庫版の『経済学批判』の中に納められていて、既読です。よくまとめられた入門的な文です。実は、そのあたりを再度あたろうとしていたときに、『経済学批判』の「序言」も再読したのですが、これは唯物史観の定式として広まっている文

があるので、それについては、また別にメモを残します。

さて、とりあえず、いつものように抜き書きメモを書いておきます。

「関係の総体が、関係を構成している諸契機とは異なる第三者として立てられるのではなく、諸契機のうちの 하나가、それ自身一つの契機にすぎないという否定的側面をもちながらも、総体を代表し包括する契機として定立される——この包括的契機の弁証法ともいふべき方法はヘーゲルの『論理学』の「本質論」においてくわしく展開されているが、マルクスは、本草稿の全篇にわたって、この方法を意識的に適用している。なお「一面的」の原語は *einseitig* であるが、この用語にも、マルクスは特別の意味合いを含ませているから、注意を要する。というのは「一面」の「面」とは *Seite* のことであり、これは一つの関係を構成する項（ラテン語で *terminus*）を意味するからである。したがって、「一面的な形態」における生産とは、まさしく、「関係の一つの項をなすにすぎぬという形態にある生産」という意味である。」 訳注 48-49P・・・*関係性の分節としての項・廣松*

上向法 49P

「交換を共同体のただなかに本源的な構成要素として措定することは、およそまちがいのなのである。むしろ交換は、最初は、一個同一の共同体内部の成員にたいしてよりは、異なった共同体相互の関連のなかで現れてくるのである。」 交換の始まり 54P

貨幣の存在が常態化することによる変化 4つ 121-8P・・・*弁証法*

「交換と分業とは相互に条件づけあっている」 138P

流通 個人が独立したものとして現れる最初の形態 205-6P

「社会的関係が諸個人から独立したあるものとして現れるだけでなく、社会的運動それ自体の全体までもが諸個人から独立したあるものとして現れるところの最初の形態でもある。」 206P

ボアギュベール 貨幣の物神性 209P

「われわれにとってのもの(*für uns*)」 238P

「貨幣は流通手段としては、僕の姿をもって現れたものだが、この僕の姿から、突然に、貨幣は、諸商品の世界の支配者および神になる」 242P・・・*貨幣の物神的性格*

「貨幣の占有が、富(社会的富)に対する関係において、私をはいりこませる関係は、賢者の石が、科学にかんして、私をはいりこませる関係と、まったく同一なのである。」 243P・・・*貨幣-富 賢者の石-科学 物象-物神化*

「貨幣が生産の発達した関係として存在しうる、賃労働が存在しているところだけであるということ。」 245P・・・*貨幣の発達した形態には賃労働の存在*

余剰の交換—生産の内部的編成—国家による統括—国際的關係—世界市場 252-3P

↑                    ↑                    ↑                    ↑                    ↑  
(物々交換) 1篇    (商品生産) 2篇                    3篇                    4篇                    5篇

「私は貨幣を他者にとっての単なる有として引き渡すことによってだけ、私は貨幣の私にとっての有を現実的に措定することができる」 264P

マルクスの貨幣に関する後の課題 6つ 269P

「自己の労働の生産物の私的所有は、労働と所有の分離と同一であること、その結果、労働は他人の所有をつくりだすことに等しく、所有は他人の労働を支配することに等しく

なることが、わかるであろう。」 271P・・・労働と所有の分離(私的所有)

「一つの社会的関係、つまり諸個人相互間の一つの規定された関係が、ここではある金属として、ある石として、すなわち彼らの外部にある純粋に物的な物象として現れ、しかも、この物象は自然のうちにそのままの姿で見いだされ、またその自然的存在からくべつされるような形態規定はもはやなにも一つそこに残されていない、ということである。」

273P・・・貨幣の物象化

「貨幣であるという規定が、ただ社会的過程の結果に過ぎないということは全然見えていない」 274P

資本・(高度な)貨幣——人間・猿 290P

「資本は物象としてとらえられ、関係としてとらえられていない」 300P

「資本とは、利潤を生産する目的をもっている交換価値のことだとか、少なくとも利潤を生産する意図をもって用いられる交換価値のことだといわれるばあいには、資本は、資本を説明するために前提されている。」 301P

貨幣と貨幣の交換・・・差異なき区別 304P

「関係の項として措定されて、使用価値そのものに対立する交換価値は・・・」 319P

「有機的体制は、歴史的に総体性になるのである。この総体性になるということが、有機的体制の過程の、その発展の一契機をなすのである。」 332P

労働者を生活のために働かせるシステム 338-349P

資本と労働の対立 347P

労働者の没価値性と価値喪失が資本の前提 347P

「この資本に対しては純然たる使用価値として相対しなければならず、・・・」 347P

労働者にとって交換の目的は生活手段であって富ではない 349P

生産的労働—反対物 資本を生産する限りにおいて生産性 368P

(資本主義社会においては)



有害な場合もある・・・・・・・・・・真の生産性とは？

「ここでは(総体化されていない・・・斜体はたわし、以下同じ)労働者は労働者として、したがって前提された多年生の主体として資本に対立しているのであって、・・・。」

395P

富が媒介者として、つまり交換価値と使用価値という両極それ自体の媒介として(中間項として)、交換価値と使用価値という両極それ自体の媒介として、措定される交換価値においてである、ということ述べておくことは重要である。この中間項は、それが対立物を総括するものであるがゆえに、つねに、完成された経済関係として現われ、また最終的にはつねに、両極それ自体にくらべて、一方的により高次の潜勢力として現われる。なぜなら、運動ないし関係は、最初は、両極のあいだを媒介するものとして現われるのだが、やがて対立物が弁証法的に必然的に進展して、その結果、この関係が自分自身の媒介として、すなわち両極をもつばら自分の契機とするような主体として現われるようになり、しかも主体は両極の自立的な前提を止揚し、このようにおのれの諸契機を止揚することによって、自分自身を唯一の自立的なものとして措定するようになるからである。」 408P

## 中間項(Mittelglied)409P

「労働としての労働が労働である」 455P

たわしの読書メモ・・ブログ 435

### ・カール・マルクス『経済学批判』「序言」岩波書店（岩波文庫）1956

『経済学批判』は、マルクス学習の初期の頃に読んでいます。『資本論』の学習会を岩波版第一冊目を使ってやったのですが、それ以前に読んでいました。今回、ひとつ前の読書メモの『『経済学批判要綱』への序説』を読んでいて、確か、岩波版の『経済学批判』の中に納められていたと確認のために引っ張り出していて、もうひとつ別の「序言」を思い出しました。唯物史観の定式のようなことで、必読の文として記憶しています。再読しつつ、定式のところの抜き書きを残します。

#### ベーシックな定式

人間は、その生活の社会的生産において、一定の、必然的な、かれらの意志から独立した諸関係を、つまりかれらの物質的生産力の一定の発展段階に対応する生産諸関係を、とりむすぶ。この生産諸関係の総体は社会の経済的機構を形づくっており、これが現実の土台となって、そのうえに、法律的、政治的上部構造がそびえたち、また、一定の社会的意識形態は、この現実の土台に対応している。物質的生活の生産様式は、社会的、政治的、精神生活諸過程一般を制約する。人間の意識がその存在を規定するのではなくて、逆に、人間の社会的存在がその意識を規定するのである。 13P

#### 拡張、生産様式（関係）論

社会の物質的生産諸力は、その発展がある一定の段階にたつると、いままでそのなかで動いてきた既存の生産諸関係、あるいはその法的表現にすぎない所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏へと一変する。そのとき社会革命の時期がはじまるのである。経済的基礎の変化につれて、巨大な上部構造全が、徐々にせよ急激にせよ、くつがえる。このような諸変革を考察するさいには、経済的な生産諸条件におこった物質的な、自然科学的な正確さで確認できる変革と、人間がこの衝突を意識し、それと決戦する場となる法律、政治、宗教、芸術、または哲学の諸形態、つづめていえばイデオロギーの諸形態とをつねに区別しなければならない。ある個人を判断するのに、かれが自分自身をどう考えているかということにはたよれないと同様、このような変革の時期を、その時代の意識から判断することができないのであって、むしろ、この意識を、物質的生産の諸矛盾、社会的生産諸力と社会的生産諸関係とのあいだに現存する衝突から説明しなければならないのである。一つの社会構成は、すべての生産諸力がそのなかではもう発展の余地がないほどに発展しないうちは崩壊することはけっしてなく、また新しいより高度な生産諸関係は、その物質的な存在条件が古い社会の体内で孵化しおわるまでは、古いものにとってかわることはけっしてない。だから人間が立ちむかうのはいつも自分が解決できる課題だけである、というのは、もしさらにくわしく考察するならば、課題そのものは、その解決の物質的諸条件がすでに現存しているか、またはすくなくともそれができはじめているばあいにかぎって発生するものだ、ということがつねにわか



るであろうから。大ざっぱに言って、経済的社会構成が進歩していく段階として、アジア的、古代的、封建的、および近代ブルジョア的生産様式をあげることができる。ブルジョア的生産諸関係は、社会的生産過程の敵対的な、といっても個人的な敵対の意味ではなく、諸個人の社会的生活諸条件から生じてくる敵対という意味での敵対的な、形態の最後のものである。しかし、ブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対関係の解決のための物質的諸条件をもつくりだす。だからこの社会構成をもって、人間社会の前史はおわりをつけるのである。 13-15P

### この定式の押さえ直し

これらの定式はマルクス批判、「マルクス葬送」の中で、様々に批判されてきました。その有効性に疑いの念をもたれています。とりわけ、物象化ということをとらえ返す中で、物象化なしにその社会は存在し得ないということも押さえおく必要があります。そういう意味で意識論からのとらえ返しも進んでいます。そのことのないところではタダモノ論に陥るとも言い得ます。しかし、この定式の有効性は基本的に生き続け、今こそマルクスの提起した遺産としてしっかりとつかんでおきたいと思います。

わたしは、この定式を「ひとは総体的相対的に、倫理で動くのではない、利害を巡って動く」というように押さえ直しています。

たわしの読書メモ・・ブログ 436

・カール・マルクス／資本論草稿集翻訳委員会訳『マルクス 資本論草稿集②』大月書店 1981

「経済学批判要綱」の第二分冊目、やっと長年抱えていた本を読み終えました。

マルクスが総体的に経済学を論じようとして書き始めた「要綱」（「グルントリッセ」という名でも通っています）。草稿的になっていて、ここから、『資本論』や『経済学批判』や『剰余価値学説史』が出てきているようです。この第二分冊に収められていた「資本主義生産様式に先行する諸形態」も文庫になっていて、マルクスがアジア的生産様式論を展開していた、そこから、マルクスが単線的発達段階論から抜けだしている、抜け出そうとしていたということで貴重な論文です。反差別論をやっている立場から、マルクスを読み解いていく時に、重要な論文になっています。

この本を読んでいて知ったのは、「要綱序説」と「資本主義生産に先行する諸形態」が有名ですが、もうひとつ、「要綱」の注目すべき論文としてこの二分冊目に収められている「果実をもたらすものとしての資本。利子。利潤。」が挙げられているということです。わたしは、ほぼ独学的に本を読み解いているので、貴重な論点を多々読み落としているのです。

わたしはマルクスの経済学の学習は、基本的な論文を押さえた上で、展開していったとかいう錯覚に陥っていたのですが、マルクスは膨大な資料をベースにして、その対話から、綿密に論を組み立てていったということが、この「要綱」を読んでいると改めて分かってきました。この『マルクス 資本論草稿集』は、⑨まで続いています。もう本を買うのを控えて、図書館を利用しようとしていたのですが、きっと読み切れないと思いつつも、古本で入手しました。いつか、また手をつけたいとの思いも込めて。

さて、いつものように抜き書きメモです。

「この第三の形態は、それ以前の諸形態にある資本を前提し、また同時に、資本から特殊諸資本への、実在的諸資本への移行をなすものである。というのは、いまやこの最後の形態では、資本はその概念上すでに、自立的に存在する二つの資本に分かれるのだからである。二者が与えられれば、次には多者一般が与えられる。この展開は、このようにして進んで行くのである。」 85-6P（ドイツ語省略、下線は本文では強調点、以下同様）

「リカードウの言うように、まったくみごとに生産の要求に比例して分配される資本は、個々の資本家たちに属するものであるにもかかわらず、資本だというその基本的形態において、その一般的形態の資本になっているのである。」 86P

「自己自身にたいして、他人のものにたいする様態で連関する、という二重指定は、この場合すこぶる実在的である。それゆえ一般的なものは一方ではたんに思考上の種差にすぎないが、この種差は同時に、特殊なものの形態および個別的なものの形態と並ぶ一つの特殊な実在的形態でもあるのである。」 86-7P・・対自であることによる対他、反照規定

「労働能力の実在諸条件が、またこの物象的諸条件が労働能力の外部に自立的に存在することが——、いまや、労働能力自身の生産物として、労働能力自身によって指定されたものとして——労働能力自身が行なう客体化としても、また、労働能力自身から独立して逆に労働能力自身の行為をとおり労働能力を支配する威力として、労働能力を客体化することとしても——現われるのである。」 91P

「ここに、奇妙な成り行きによって所有権の弁証法的転回が生じることが認められるのであって、所有権が、資本の側では、他人の生産物の権利に、あるいは他人の労働にたいする所有権、他人の労働を等価なしに取得する権利に転回し、労働能力の側では、自己自身の労働あるいは自己自身の生産物にたいして、他人の所有にたいする様態に関わるべき義務に転回するのである。」 97P

「本源的には所有権は、自己の労働にもとづくものとして現われていた。いまや所有は、他人の労働にたいする権利として、労働が自己自身の生産物を取得することの不可能として、現われる。いまや、所有と労働との、そのうえさらに富と労働との完全な分離が、両者の同一性から出発した法則からの帰結として現われるのである。」 97P・・・所有権からの転回、裏表

「資本の再生産と蓄積」のなかの論考・・・資本主義的価値増殖ではない労働は、「使用価値としての労働」→資本主義においても、ひととひととの関係の労働は「使用価値としての労働」的性格を有しうる？

「古典古代の歴史は都市の歴史であるが、しかしそれは、土地所有と農業とを基礎とする諸都市の歴史である。アジアの歴史は、都市と農村との一種の無差別的な一体性である。」 129P

「(ゲルマン人の場合には、) 共同体は連合体としてではなく一体化として現われ、統一体としてではなく、土地所有者たちが自立的諸主体として現われる。」 131P

「これらの形態すべてにおいて (古代、アジア、ゲルマン)、土地所有と農業とが経済的秩序の土台をなしており、それゆえ使用価値の生産が、すなわち自らの共同体に一定の諸関係をもち、それらの関係のなかで共同体の土台をなしている個人の再生産が経済的目的

となるが、・・・」 133P

「(古代、アジア、ゲルマンにおいては) 労働の主要な客体的条件は、それ自体労働の生産物として現われるのではなくて、自然として目前に見いだされるのである。一方には生きた個人、他方には彼の再生産の客体的条件としての大地。」 134P

「共同体が旧来の様式のままに存続するためには、その成員が、前提された客体的条件のもとで再生産されることが必要である。生産そのものと人口の増進（これもまた生産のうちにはいる）とは、必然的に、次第にこれらの条件を止揚するのであり、それらを再生産したりするのではなく、破壊するのであって、それとともにまた共同体組織が、その基盤となっていた所有諸関係とともに滅亡していくのである。最もしぶとく、最も長くもちこたえるのは、必然的にアジア的形態である。このことはアジア的形態の前提に、すなわち、個々人が共同体に自立していかないこと、自活的生産圏域、農業と手工業との一体性、等々 [が存在すること] という、その前提に根ざしているのである。」 135P

「古代人のもとでは、・・・富は生産の目的としては現われないのである。」 137P

「ブルジョア的経済学では——またそれが対応する生産の時代には——、人間の内奥のこうした完全な表出は完全な空疎化として現われ、こうした普遍的対象化は総体的疎外として現われ、そして既定の一面的目的のいっさいを破棄することが、まったく外的な目的のために自己目的を犠牲に供することとして現われている。だからこそ、一方では、幼稚な古代社会がより高いものとして現われるのである。・・・他方、近代的なものは、充たされないままになっているか、あるいは、それが自足したものとして現れるときには、低俗である。」 138P・・・必ずしも発達史観ではないマルクス

「歴史的過程の結果であるのは、人間定在のこの非有機的諸条件とこの活動する定在との分離」 140P

「個人の所産としての言語というのは、ばかげている。だが、一個人の所産としての所有というのも、それと同じ程度にばかげているのである。」 141P(「ばか」という語には「ママ」というルビをつける)・・・言語は通時的共時的所有し得ないファンド、そのファンドがなければそもそも私的所有なども起きない。そもそも、知的所有権などが通時的共時的歴大な蓄積の上でうるとしたら、そもそも個人がその上に積み上げ得ることは、無限大にゼロに近づく、インフラなどもしかりー

「交換は、群棲的存在 [群棲体] を不必要にし、それを解体する。この解体が生じるのは、人間はもはや自己にたいして、ただ個別化された者として連関するだけだが、しかし、彼が自己を一般的かつ共同的なものにすることが、自己を個別化された者として措定するための手段となっている、というように事態が変わったときである。」 150P

「資本とは、このように、明らかに一つの関係であり、しかも一つの生産関係でしかありえないのである。」 176P

道路建設は、以前は賦役、資本主義においては税（資本家、労働者）——運輸は資本の必要経費に同じ、ただ鉄道網などは税でも(運輸が、公共事業が資本の論理で動き得るまでの資本主義的生産様式の発達の中で、税などでも 201-2P 後載)・・・資本の循環の中でとらえる 191-6P

「富とは、素材的に考察するならば、欲求の多様性にほかならないのである。」 197P

「要求の体系と労働の体系」 198P

「資本それ自体が——必要な規模でそれが定在するものとして——はじめて道路を生産するのは、道路の生産が生産者にとっての、特に生産的資本そのものにとっての必要事となり、資本家の利潤獲得のための一条件となったときである。」 202P

「公共土木事業が、国家から切り離されて資本そのものによって行われる仕事に移行する……………」 203P……………鉄道会社のプロジェクト・コングロマリッド

「資本家はしばしば、保護関税、独占、国家的強制によって、剰余労働時間への支払いを強奪する。」 205P……………資本の国家、もろもろの利用

「生産の一般的、共同的諸条件はすべて——資本としての資本が自らの条件のもとでそれらをつくりだすことがまだ行われないうちは——、国の収入——国庫——の一部で賄われ、また労働者は、資本の生産力を増大されるにもかかわらず、生産的労働者としては現われないのである。」 205P……………資本の国家の利用

「競争一般は、ブルジョア経済のこの不可欠の牽引者は、ブルジョア経済の諸法則をうち立てるものではなくて、この諸法則の執行者なのである。それゆえ、無制限の競争は、経済的諸法則という真実にとっての前提ではなくて結果であり、この諸法則の必然性が実現されるさいの現象形態である。」 237P

マルサス——リカードウ 312-320P

リカードウは労働という剰余価値を生む使用価値があり、賃金は労働力に払われるという搾取の関係を読み落とした？

ここで、彼(マルサス)の頭のなかにあるのは、為し加えられた労働を越える利潤であって、この利潤は固定資本等々から結果として出てくるものだと言うのである。」 317P

マルサス人口論 331-3P

「資本によって作りだされた価値(…)の総額は、労働時間に正比例し、流通時間に反比例するのである。」 369P

「流通時間を与えられたものと前提すれば、回転が必要とする総時間は生産時間に依存する。生産時間を前提すれば、回転の継続時間は流通時間に依存する。」 369P

「流通費用は、所有の共同性にもとづくものではなくて、私的所有にもとづく自然的な分業の費用にすぎない。」 378P

「自由競争において自由なものとして措定されているのは諸個人ではないのであって、資本が自由なものとして措定されているのである。」 408P

「この種の個人的自由は同時に、いっさいの個人的自由の最も完全な止揚であり、物象的諸力という形態、それどころか圧倒的力をもつ諸物象——たがいに連関しあう諸個人自身から独立した諸物象——という形態をとる社会的条件のもとへの個性の完全な屈服である。」 410P

「競争には、価値と剰余価値とについて立てられた基本法則とは区別して展開される基本法則がある。それは、価値が、それに含まれている労働またはそれが生産されている労働時間によってではなく、それが生産される労働時間、すなわち再生産に必要な労働時間によって規定されている、という法則である。」 419P……………対象化された労働時間ではなく、現在に必要な労働時間

「流通時間は、このような生産時間と区別して、資本が資本として行う独自の運動の時間と見なすことができる、資本の時間なのである。」 422P

「直接的形態における貨幣の止揚は、資本流通の契機となった貨幣流通の要求として現われる。なぜなら、その直接的な前提された形態においては、貨幣は、資本の流通の制限だからである。」 440-1P

「経済学者たちの粗野な唯物論は、人間の社会的生産諸関係と、諸物象が受け取る、これらの関係のもとに包摂されたものとしての諸規定を、諸物の自然的諸属性とみなすところにあるが、この唯物論は、同じほど粗野な観念論、いやそれどころか物神崇拜なのであって、それは社会的諸関係を諸物に内在的な諸規定として諸物に帰せしめ、こうしてそれらを神秘化するのである。」 466P

「労働時間の節約は、直接的生産過程の視点から、固定資本の生産とみなすことができる。そして人間自身がこの固定資本なのである。」 499P・・・「固定資本」ということが、二重の意味で使われているのでは？ ここでは、蓄積された富。

「労働の果実の先取りは、・・・それはその根源を、固定資本の、特有の価値実現様式、回転様式、再生産様式のうちにもっているのである。」 531P

「資本そのものによって資本の歴史的発展がある一定の点にまで達すると、資本の自己増殖を措定するのではなく、それを止揚する、ということである。生産力の発展が、ある一定の点を越えると、資本にとっての制限となり、したがって、資本関係が労働の生産力の発展にとっての制限となるのである。」 558P

資本主義の成立期における強制労働 591P

「価値という概念がまったく近代の経済学に属するのは、この概念が、資本そのものと資本に立脚する生産との最も抽象的表現なのだからである。価値概念のなかには資本の秘密が漏らされている。」 602P

「労働の客体的諸条件が生きた労働にたいして、まさにその規模そのものによって表わされるような、ますます巨大になっていく自立性をとり、そしてますます大きくなっていく諸部分からなる社会的富が、疎遠かつ圧倒的な力として労働に立ち向かう、というふう

に現われるのである。」 706P

「すなわち、社会的労働そのものが自己の諸契機の一つとして自己に対置した歴大な対象 [化] された力が、労働者にはではなくて人格化された生産諸条件すなわち資本に属している、ということである。」 706P

「しかし明らかにこの転倒過程は、歴史的な必然性にすぎず、ある一定の歴史的出発点あるいは土台から生じる生産諸力の発展にとっての必然性にすぎないのであって、生産の絶対的必然性ではけっしてなく、むしろ瞬時的な必然性である。また、この過程の結果であり目的 (内的) であるのは、過程のこの土台そのものをも過程のこの形態を止揚することである。」 706-7P

「労働者の無所有、および、対象化された労働による生きた労働の所有、すなわち資本による他人の労働の取得——両者は同一の関係を対立する両極に立って表現しているにすぎない——は、ブルジョア的生産様式の基本条件であって、ブルジョア的生産様式にとってどうしてもよい偶然事ではけっしてない。」 707-8P

物々交換・商品・貨幣の歴史 709-729P

教会が貨幣の布教者 727P

商業資本とそこからの資本主義への展開 760-771P

「交換価値は、使用価値が価値の経済的状态ではまったくなく、人間一般のための生産物がある、等々、ということにすぎないのにたいして、価値の社会的形態を表現しているのである。」 793P

「交換は、一つの共同体組織の内部の諸個人のあいだで始まるのではなく、共同体組織が果てるところで、共同体組織の境界で、さまざまな共同体組織が接触する地点で始まる。共同体所有は、最近、特殊スラブ的な珍品として再発見された。しかし、実際にはインドが、そのような経済的共同体組織の、多かれ少なかれ解体しているものまだ完全に見分けられる、きわめて多様な諸形態の見本帳をわれわれに提供しているのである。そしてかなり徹底的な歴史研究によって、そのような経済的共同体組織があらゆる文化民族の出発点あったことが再発見されている。私的交換にもとづく生産システムは、なによりもまず、この自然生的な共産主義の歴史的解体である。しかしながら他方ではまた、交換価値生産をその全体的な深みと広がりにおいて支配している近代世界と、すでに解体した共同所有が基礎となっているもろもろの社会構成体とのあいだには、幾多の経済的システムが横たわっているのである。」 811P・・・「資本主義に先行する諸形態」とのリンクと、分業の始まり、マルクスの古代社会研究

たわしの読書メモ・・・ブログ 437

・熊野純彦『マルクス 資本論の思考』せりか書房 2013

マルクスの『経済学批判要綱』学習から派生した学習。この著者は倫理学・哲学史をやっていて、廣松さんがかなりの期待をかけていたひとです。倫理学の方に力を注いでいたので、倫理学をやっていくと、マルクス的な廣松さんの思いとはズレが生じたようで、どうも廣松さんの思いには応えがたかったようなのです。わたしの解釈ですが。

先人への思い、死者への思いというところで、廣松さんへの思いに応えるというところがあったのでしょうか、経済学的なところでの論攷です。

さすがは廣松さんが期待をかけていたひとで、博識の廣松さんのように、膨大な本を読み込んでの蓄積の上で、『資本論』の解説になっています。ただ、『資本論』をそれなりに読込んでいないと、とても読めません。廣松さんにならって、哲学的な基礎知識をもっていないと、辞書をひかないと、なかなか読み進められません。わたしはその辺のはしりかたをみにつけていて、かなり読み飛ばしているのですが。

この本は、『資本論』を巡る論争を、註でかなりくわしく紹介してくれていて、『資本論』をもっと読み込んでいくひとへの案内書になっています。とても、わたしはそのあたりまで踏み込めそうにありません。いくつかの、わたしの研究に関わる論争の文献には、あたりたいたいと、積読している本を引っ張り出し、文献を購入して、読書メモをまた残します。

著者は「カントの新訳やハイデッガーの改訳に手を出しながら」 733P この著をなしたとのこと、超人的なひとですが、凡人のわたしは「関係性の総体」や物象化論というマルク

ス——廣松的なところへの共鳴のなかでこの本を読み解こうとしていました。

さて、とてもきちんと押さえられていないのですが、いつものように抜き書きです。前回から適用しているように原語表記は基本はぶき、強調点は下線\_\_\_\_で。原文ページ数も略。

「哲学的思考は、無前提的な思考であること、じぶん以外のなにものも前提とはしない思考であることを宣言する。」 22P

「無前提であるとは、なにものも前提としないことではない。「無前提的」であるとは思考にとってむしろ、思考それ自身が前提とすることがらへとさかのぼっていくことである。生きている者のみが思考するかぎりでは、生きていること自体が、思考するいとなみにとってもその前提にほかならない。いっさいの思考の前提は、かくしてまた「第一の歴史的行為」と一致する。すなわち「物質的な生そのものの生産」こそがそれである。」 23P

身体性の三つの帰結 ①人間は道具の製作と使用することによって世界と関係する②人間は身体として存在することで、とうぜんまた空間的存在者として存在している③人間は、身体として存在していることによって、あわせて時間的にも有限な存在にほかならない 26-7P

「あらゆる経済にあつて「時間規定」は、その組成にとって決定的意味を有している。」 30P 時間の節約と時間のエコノミー

「資本はどのようなかたちで時間のエコノミーを貫徹するのか、時間のエコノミーを固有名詞として実現することで、資本制は空間をいかに再編し、世界をいかにつくり変えるにいたるのか。」 30P マルクスの『資本論』で解きあかそうとする、枢要な問題系のすくなくともひとつ

「マルクスを読むことは人間が「世界のうちで-他者たちとともに-存在すること」を読みとくことであり、かくまた世界の総体について思考することである。……(そのとき) ひと哲学的にもなお、現在にあつてはやはり、資本制を問いかえす作業から 目をそらすことができないはずである。」 30-1P

「「共有物」(コモンズ)」 31P

「私たちが現在なおそのうちで生を織りあげ、他者たちとかかわりあっている世界を、総体としてとらえかえすころみにほかならない。」 32P

「私を支える大地の堅固さ、私の頭上にひろがる空の蒼さ、風のそよぎ、海の波浪、光の煌めきといったものは、なにかの実体にかかっているものではない。それらは、どこでもないところから到来する。どこでもないところから、存在しない「或るもの」から到来し、あらわれるなにものも存在しないのにあらわれ、かくしてまた、私がそのみなもとを所有することができずに、たえず到来する。このことによって、感受性と享受との未来が描かれるのである。」 レヴィナス 33P

「大庭によれば、マルクスの「思想的営為」のもつべき意味が「時とともに「科学としての資本論」——「科学的社会主義」なる、まさに近代的世界観の地平上での(!)体系化によって次第に曖昧化され<批判>の批判たる所以が次第に水増しされてしまった。」のである。」 34P

「そもそも『資本論』全三巻が問題にするところは、「資本制的な生産様式」のありかた

そのものであり、あわせてまた「それに呼応する生産関係ならびに交通関係のありかたにほかならない。」 37P・・・資本論の要旨

「とほうもない」とカント 37-8P

「一見したところ」「現象」する 39P

「商品は「欲求」を満足させること使用価値となる。つまり「事物の有用性が事物を使用価値とする。」 41P

「先慮にもとづく要求」 42P

『資本論』の商品論におけるふたつの留保①「「事物の多様な使用方法を発見すること」がそれじたい一箇の「歴史的行為」であること」②「使用価値は」「ただ使用もしくは消費においてのみ現実化する。」 42P→「商品はほんとうはものではない。すこしだけ先ばしりしていえば、商品とは運動であり、関係である。」 43P

「商品が有する「二要因」とは使用価値と交換価値ではない。むしろ使用価値と価値であるしだいとなるであろう。」 44P

「人間の生理的活動が価値の「実体」として問題になっているのであろうか。」 47P・・・物象化批判——実体主義批判の核心

「価値の実体とされる人間労働とは、関係の別名なのである。」 49P

「いわゆる<蒸留法>には当面は消し去ることができない論理的難点がある。それは具体的で有用な労働と、抽象的人間労働とをつなぐ枢要な論点を、マルクスがここでいったん消去してしまっているところから生じる難点にほかならない。」 49P

「商品とは「過渡的な存在」であると語ってもよい。」 50P

「商品が運動のうちにあるという事情が一方で、やがて商品流通をめぐっていくつかの制約条件を商品に課することになるだろう。その同じ性格が、他方でやがて資本そのものへ転移されてゆくことになるはずである。——資本もまたつねに動的な存在であり、どのような場合でも、可能が可能性として現実化されている状態にある。資本はすなわち運動し、生成しつづけているのである。・・・使用価値が捨象されるとともに、「他者に対する使用価値」という側面も度外視されていた。この件は、いわゆる<蒸留法>と、抽象的人間労働の規定をめぐってひとつの論理的空隙をかたちづくっている。・・・その背後にあるものは、交換によってなかだちされた関係の総体にほかならない。」 50-1P

「マルクスが、労働にあって人間に可能なことがらは「素材の形態を変化させること」だけであり、したがって労働は使用価値の唯一の源泉でないと説き、また労働そのものにおいても「人間はつねに自然力に支えられている」と主張していることである。」 53P

「しばしば指摘されているとおり、マルクスがここで（価値形態論で）「等号＝」を導入していることは、ことがらの理解にとってはミスリーディングなものであった。「あたいする」という表現に、当面の問題すべてがむしろかかっているからである。」 57P

「リンネルが価値であることは、ただこのような「回り道」を介して表現されるほかはない。上着は、手でつかめる「自然形態」のままに価値をあらわしており、リンネルは上着の自然形態のうちのみずからの価値を表現する。「このようにしてリンネルは、みずからの自然形態とはことなつた価値形態を受け取ることになる」のである。」 58P

価値鏡 59P・・・フィヒテ



「価値の存在の背後には、むしろ関係がある。関係のなかでこそ、価値が生成する。」「その超自然的属性が示すものは「純粹に社会的な或るもの」なのである。単純で個別的な価値形態の表現するものは、それが「或る社会的関係」をはらむことを暗示している。」 60P

「交換の具体的ありかたではなく、交換そのものの原理的な非対称性にあることになる。」 61P

取りかえ quidproquo 64P・・・物象化論とリンク

「感覚的に超感覚的な事物とは「社会的な事物」であり、その背後にあるものは「社会的な関係」にほかならない。その社会的関係を商品関係が覆いかくすことによって、人間的な労働にぞくする「社会的な性格」が「労働生産物そのものの対象的性格」として映しだされる。すなわち、生産者自身が商品生産社会の内部で「総労働」に対して有する関係、その社会的寄与分が、対象的なかたちを取った労働生産物それ自体の社会的関係であるかのように映現するのである。これは関係に帰属する性格の関係の項への転移であり、関係のなかで生成する性格が、存在のしかたへと移行することにほかならない。それはいずれにせよ一箇の「置きかえ」であり、倒錯である。ここで「さまざまな事物の関係という幻影的な形態」であらわれているものは、「人間自身の特定の社会的関係」であるにすぎないからである。ただし、背後にあるものは、当の社会的関係の総体にほかならない。」 65P・・・第二形態から派生する「置きかえ」、社会的総体的関係から関係に帰属する項への転移

「商品にまとりつづくフェティシズムに似たものを探すとすれば、ひとは霧に蓋われた「無限境」に、「宗教的世界」に逃げこむほかはない。それは——若きマルクスが、或る論争の脈絡で、ヘーゲルを踏みながら使用したことばをつかうならば——「顛倒した世界」である。ただし、その総体において顛倒された世界が問題なのである。」 65-6P

「マルクスはここでは商品とは「感覚的であるとともに超感覚的である」ものとも、「感覚的であるにもかかわらず超感覚的である」ものとも語っていない。「感覚的に超感覚的」と語っているのだ。」 71P・・・廣松の「それ以外のもの、それ以上のもの」との関係

下降—分析と上向法 73P

「具体的で私的な労働が、抽象的で社会的な性格を有しているしだいは、交換の過程にあってはじめてあらわれる。つまり「私的な労働のさまざまが、交換によって実現される諸関係によって「はじめてじっさいに社会的総労働の諸環として実証される」のである。」

83P・・・交換においてはじめて

「相対的余剰」モデル 86-8P

日山紀彦 89P・・・宇野と廣松の対話→読書計画に織り込む

「「一般的商品としての貨幣」とは「社会の、物象化されたきずな」であり、「一般的な売春」であって、つまりは「諸関係の解体」「一般的効用関係」だからである。かくして、「すべては売り物」となる。」 97-8P

「ある非対称性」 98P

「そこに存在しているのは非対称的關係であって、関係のこの非対称性によって「商品を貨幣へと置き換えうることは「偶然性」にさらされている。しかも、たほうこの偶然性を「貨幣の超越論的力」が覆いかくしているのである。貨幣の超越論的な力が「購買と販売の分離を可能としながら、同時にそれを隠蔽しているのだ。」 99P・・・貨幣の超越論

的力と非対称性

「リカードへといたる古典経済学は売り＝買いとみなし、セーの法則をみとめることで、対称的な関係を見いだした。マルクスはかえって売りと買いとのあいだに非対称性抹消不能な差異をさしあたり発見する。その非対称性は「相対的価値関係と等価形態という非対称的な対極関係」に由来している。その非対称性が貨幣へ感染して、非対称性に汚染された貨幣はしかし、非対称的な対極関係そのものを覆いかくす。かくして、「古典経済学が対称的な関係とみなしているところに、マルクスは根源的な非対称性を見出している」といってよい」 102P

「資本としての貨幣の流通は、これに反して自己目的である。価値の増殖はひとりこの不断に更新される運動のうちのみ存在するからである。資本の運動には、それゆえに限度がない」のである。価値が、かくして「一箇の自動的主体に転化する。価値はつまり「それが価値であるがゆえに価値を生む」という「オカルト的な質」を受けとることになるのである。」 127P

「労働はそしあたり、「人間と自然とのあいだの一過程」、自然と人間とのあいだでの「物質代謝」である。」「すなわち人間は自然を加工して、みずからにとって使用価値をもつものとして形成しなければならぬのである。このような意味での「有用労働」は、いってみれば「永遠の自然必然性」にほかならない。」 146P

「つまりたとえば紡錘が「過去の労働の生産物であるということはどうでもよいこと」なのだ——その件が問われる場合があるとすれば、それはひとえに用具に欠陥があるときである。つまり、「切れないナイフや切れがちな糸などが刃物屋のAとか蠟引工のEをさまざまと想いおこさせる」にすぎない。」 162P

「資本そのものにとっては交換と生産とのあいだに区別はない。交換は事物と事物との相互関係あり、生産もまた事物と事物とのあいだの交互作用にすぎないからだ。」 164P

「なぜ、このような不法が罷り通るのか。どのような株式投資であっても「いつかは雷が落ちることをだれも知りながら、一般に「わが亡きあとに洪水は来たれ」こそが一切の資本のあいことばであり、資本制そのものの標語にほかならないからである。」 201P・・・  
*資本家に倫理はない、悪無限的利潤の追求*

「労働力の平等な搾取こそが、資本の第一の人権となる」日がやってくる。人権という言葉の意味が変容したのではない。人権とは市民の権利であって、市民とはもちろんブルジョアジーの別名にほかならなかつたからである。」 202P

「資本制的生産は自然と人間のあいだの「物質代謝」そのものを「攪乱する」。「永遠的な自然条件」すらも攪乱するのである。資本制の進歩は、農業についていえば、「土地から収奪するための」進歩であるほかない。資本制の運動は、自然の「多産制の不断の源泉を破壊すること」へといたりうる。」 239P→註(7)240P の椎名重明と長島誠一、本入手、*エコロジーと農について後日学習*

「マルクスの批判的視線は近代科学そのものにまで及んでいた。」 239P→註(8)240P 佐々木力

「マルクスはもとより、すこしも産業主義者ではない。生産力主義者でもありえない。また、科学的社会主義というかつての標語とうらはらに、マルクスは科学主義者でもない

のである。」 239-240P・・・マルクスのとらえ返しで重要

「一般的に資本制は、たえずさまざまな外部を内部化して、資本制のうちに繰り返されることで存続してゆくが、資本制の存続は同時にまた、その内部に差異のさまざまをあらたに生産しつづけ、その差異をあらためて内部化することで延命してゆく。資本が反復的に産出する差異は、そして当然のことながら差別を組織することで、それじたい定常化することだろう。」 265P・・・継続的本源的蓄積論とつながる差別の生産・再生産構造の問題として重要なおさえ

「浮浪に対する血の立法」 270-2P

「本源的蓄積の過程こそが資本制の原罪であるとして、しかし「原罪はつねに現罪である」（平田清明のことば 281P 註(14)）のではないか。つまり本源的蓄積の暴力性は資本制それ自体の暴力性なのではないだろうか。それは一方では差異を抹消する暴力であり、他方では差異を産出しつつ回収する暴力なのではないか。」 277P

「資本制はむしろ、外部との境界にあってこそ暴力的な蓄積を継続する。」 278P

「ドイツ革命に殉じて散った、女性革命家がつとに見てとっていたとおり、資本は「全地球の生産手段と労働力」「全地帯の自然的財宝」を巻きこんで運動をつづけ、つねに外部を内部へと編入するとともにあらたな外部をつくり出して、内部を差異化させて内なる外部をも産出しつづけるものだからである。資本の本源的蓄積とはそのかぎり、資本の生成とともにくりかえし回帰し、資本制の運動とともに不断に反復する「原罪」にほかならない。」 279P

「アリストテレスは「運動」（キネーシス）とは「可能的ななにかであるものが、あくまでその当の可能態（デュナミス）としての資格にあたって完全に現実化されているありかた（エンテレケイア）」であると語った。つまりその可能性において現実態（エネルゲイア）にある、すなわち現実的なありかたをしている、ということである。」 285P

「資本、商品資本としての商品もまた一箇の過程であり、その背後に或る関係であって、たえず生成と運動の様相のもとにある。」 286P

「登場したばかりの資本にとって、とりあえず「交通すなわち交換に対する場面的制限」は、資本の活動を制約する一箇の自然的限界である。資本制の発展そのものにより、しかしこの限界は突破される。それはまさに「時間によって空間を絶滅」すること、つまり空間的な差異を時間的な差異を利用し、後者の差異を「縮減」しながら抹消してゆくことにほかならない。資本制にとって一般的なこの「傾向」は、「地球全体をみずからの市場として獲得」するにいたるまで継続してゆくことだろう。」 340P

「資本は、しかしなぜ一般に時間を「最小限」にまで解消しようとするのだろうか。それは、資本にとって、循環の連続性がそうであったように、その「回転」の速度こそが生命線であるからである。資本が回転する時間つまり資本の「回転期間」と、その度数すなわち「回転回数」が、つぎに問題となるはずである。」 341P

「なんらかの実体的な特性が固定資本を固定資本とするわけではない。生産過程でになう「特殊な機能」のみが、労働手段を固定資本とするのである。ここでも実体ではなく機能を、固定された存在ではなく関係を問題としてゆくマルクスの視覚が、さしあたりは目立たないかたちで貫徹されているのをみとめることができる。」 350P・・・機能と関係

「この神秘化の、もしくは顛倒と移調の結果はなんだろうか。総資本と利潤との関係が問われ、前者に対する後者の比が問題にされるところでは、「資本はじぶん自身に対する関係としてあらわれる」。自己関係という、ヘーゲル論理学大系を意識して使用されている用語が、ここで問題の所在を告げている。」462P・・・ヘーゲル「自己関係」

「なぜだろうか。この、じぶん自身に対する関係としての資本こそが、自己増殖する価値としての資本がその神秘化を終了する地点を、あらかじめ指ししめしているからだ。これは利潤率でなく一般的利潤率が支配し、価値ではなく生産価格が支配して、一定量の資本が一定量の資本であるがゆえに、その自己運動において利潤を生むとみなされる地点にほかならない。そこでは「資本と労働」でなく「資本と資本」が相対し、現実のいっさいが「競争」のなかに置かれることになるであろう。」462P

「競争とは、個々の資本にとっては一箇の超越的条件である。個別資本は競争においてその外部にさらされ、当の外部を個々の資本は操作することができないからである。競争は、しかし、やがて、資本制を資本制として可能とする超越論的な審級となるはずである。」462P

「さかのぼって確認しておくなら、そもそも費用カテゴリーそのもの、考察としての基礎として導入された基礎範疇それ自体が、・・・・・・・・かくして生起するのは、資本制そのものの構造の期限とその成立要件の忘却であり、隠蔽である。／価値から価格への転化あるいは移行が問題になるときに、その過程でじっさいに変換していたのは、むしろ「認識様式」そのものである。そこで問題になるものは、「分析者に固有の認識様式から当事者流の認識様式への変換（切りかわり）」なのであって、「この「変換」の理解なしには「転化」概念の理解はない」。宇野弘蔵の学統にぞくしながら物象化論へと接近した論者のひとりが、そう強調しているとおりでである。」511-2P・・・für es と für uns の弁証法 註(10)515P

「形態転換」512P→この著のキーワード「取りかえ quidproquo」64P とつながり、物象化論とリンク

「マルクスの資本論体系が経済学でなく、経済学批判であるしだいかかわっている。」513P

「マルクスの『資本論』の主題はむしろ、古典派経済学のうちに典型的にあらわれている資本制的な日常意識をたどりつつ、それを内的に批判するところにこそあったのだ。」

514P・・・そのひとつとしての労働価値説批判

「マルクスの説くとおりに、「資本制的生産の真の制限は、資本そのものなのである。」528P

「生活手段としての自然の豊かさ」——「労働の生産性」が依存する 531-2P

「社会契約というミュトスを前提にするなら、ロックがそう語っていたように、大地と生育するものはかつてひとしく万人のものであったし、ルソーがそう指弾したとおりに、土地に囲いをして、「これが俺のものだ」と宣言した者こそが、いっさいの不平等の起源に責めを負うものでもあるだろう。具体的な歴史過程を問題とする経済学批判のロゴスからするなら、資本制的な土地所有の起源は、それじたい資本制の原罪とかかわっている。「本源的蓄積」を経た「土地所有の独占が資本制的生産の歴史的前提」なのである。」533P

「土地所有権には、法的にいえば、土地の利用、土地からの収益、土地そのものの譲渡にかんする権利がふくまれている。支配あるいは全面的権力としての所有は一般に、所有

対象の利用権、そこからの収益権、また譲渡権をふくんでいるからだ。この「法的観念そのもの」は、しかし、なにほどのことがらも意味していない。土地所有がひとつの権利であるとしても、その「力の行使はひとえに、かれらの意志にはかかわりのない経済的な諸条件にのみかかっている」からである。」 536P

「土地が売買される時、譲渡され入手される当のもの（「大地の一片」）については、その価値はなにもない。価値がないものに価格がつけられて、売買の対象となる。なぜそのような擬制が可能となるのか。「なんらかのものを売るためには」——と、ヘーゲル『法哲学』「抽象法」の一節を想起させるしかたでマルクスは書いている——「そのものが独占できるものであり、譲渡できるものであることのほかにはなにも必要とされない」。土地はただ境界を設定され、その一面積がそこにふくまれている生産条件とともに独占の対象となり、法的に所有権が移転しうるだけで、売買の対象になるのである。」 538P

「なんらかのものを売るためには、そのものには価格がつけられなければならない。価格が附与されるためには、そのもの（ここでは一定の土地）には、また、他のもの（べつの土地）との差異が帰属していなければならない。／差異が、価格を生む。さしあたりはことなる地代を生み、その地代（差額地代）によって、土地そのものの価格が遡及的に決定されるのである。マルクスの地代論の本論が、いわゆる「差額地代」の問題から開始されるゆえんである。」 538-9P

「自然のうちにはそれじたい「自然発生的」な生産性が潜在している。自然が——労働を介して一人間に与えるものは、つねに人間の必要を上まわっている。この間の消息こそが、すべての考察の基礎なのだ。農業労働は——それがいっさいの労働のうちでももっとも「本源的」な生産活動であることはべつとして——、その意味では、資本制的な生産様式が支配的である社会にあってなお、とりわけて注目にあたいする生産の現場であることをやめない。なぜだろうか。／「自然の豊饒さがここではひとつの限界、ひとつの出発点。ひとつの基礎をなしている」からであり、「たほうの労働の社会的生産力の発展が、もうひとつの限界、出発点、基礎をなしている」からである。／それゆえ問われなければならないことは、資本制による自然の利用とその限界であることになるはずである。」 543P

「ここで問題の落流とは、つまりは「ひとり土地の特殊な部分とその付属物をを自由に処分しうるひとびとだけが利用できる、独占的な自然力にほかならない。この独占可能性ならびに、それとうらはらな移動可能性が、当面している場面を考えるうえで、不可欠の条件となるはずである。」 550P

「アジア的な「主権」とは「国家規模で集中された土地所有」にほかならない。このような政治的かつ経済的制度は、「直接に生産そのものから生まれて、それ自身また規定的に生産に対して反作用する」。同時にこの関係のうえに、「生産関係そのものから生じてくる経済的共同体の姿態の総体」が築かれて、「その独自の政治的姿態」も構築されるのだ。いわゆる唯物史観の公式が、マルクスの、膨大な歴史的・地理的な展望のうえに築かれているしだいを、ここでも確認することができるだろう。」 582P

「究極的対立は、しかし、資本と土地所有のあいだに存在するのではない。「生命の自然法則」と資本制のあいだに存在するのである。」 589P

「マルクスのロシア研究は、その最晩年にいたるまで継続されて、変容を遂げていった。

その最終成果にほど近いすがたを、私たちはたとえば、ヴェーラ・ザスーリチの手紙に対する返信、ならびにそのための四つの草稿に展開されているかたちで確認することができる。ロシアのミール共同体に対する評価の変化が、土地所有をめぐるマルクスの思考をどのくらい変様させるものとなりえたか。この件については、とりあえず想像のかぎりではない。「残念なことには、かれにとってこの計画はついに実現されなかった」からである。」

589P・・・註(5)和田春樹→購入

「利子生み資本の源泉は、時間的な隔たりであった。時間が価値を生み、時間のなかで貨幣が価値を増殖させるとは、とはいえ端的に一箇の非合理にほかならない。右のようなしだいによって、とはいえ、時間そのものが価値を生むという神秘が、あたかも神秘ではないかのように神秘化されるのである。」 638P

「がんらい利子とは一箇の不合理であり、悖理であった。その意味では「利子の自然な率」などというものは存在しえない。利子そのものが一箇のパラドクスであり、しかも現に作動し、そのつど妥当している逆理なのである。「じっさい、ひとえに、資本家が貨幣資本家と産業資本家とに分離することのみが、利潤の一部を利子へと転化させて、およそ利子というカテゴリーを創りだす。そしてただ、このふたつの種類の資本家のあいだの競争だけが、利子率を造りだす」。マルクスがそう書きしるしているとおりでである。」 639P

「機能資本家（産業資本家と商業資本家）」 640P

エンゲルスの編集問題 665-6P 註(2)・・・・・・・・・・弁証法の法則化と法則の物象化

「マルクスは『資本論』第一巻ですでに「信用制度は当初は、蓄積の控えめな助手としてこっそりと入ってきて」、「やがては競争戦におけるひとつの、あらたな恐ろしい武器となり、そしてついには諸資本の集中のための巨大な社会的機構へと転化する」と書いていた。」 689P

「地球規模の収奪」につけられたルビ「グローバリズム」 691P

「利子額を利子率で除する演算が、「資本換算」として承認される。この操作の結果として得られるものが「資本価値」とみなされ、利子生み資本はそのほんらいの形態において陥穽されるのである。そこでは「価値増殖過程」の「痕跡」のいっさいが消去され、かわりに登場するものは「価値増殖する自動運動体としての資本の表象」にほかならない。／ここに資本のオートノミーが陥穽されて、資本の派生的形態にすぎない利子生み資本こそが資本のほんらいの形態であるかのような幻想がむしろ現実化してゆく途が拓かれる。資本はフィクショナルな存在として、みずからの痕跡を抹消する。」 695P

「株式会社は、こうしてマルクスにとって、或る意味ではたしかに「あらたな生産形態へのたんなる通過点」としてあらわれていた。」 697P・・・ただし、「国独資」や的なことがもつ意味をとらえ返す必要

「株式取引市場における貨幣価値は、結局は「名目的な貨幣資本のしゃぼん玉」であるほかない。」 699P・・・「名目的」に「ノミナル」のルビ、「しゃぼん玉」に「バブル」のルビ

「マルクスは、利子生み資本の登場によって、資本はそのものとして商品となる、と説いていた。株式制度と証券市場の展開をつうじて、資本のこの商品化が完結する。資本はもはや、資本としてその外部をもたない。信用制度のなかに株式制度を着床しおえた資本

システムにとっては、いまや「入力も出力もない」。いっさいは市場の内部で調達され、すべては市場の内部へと送りかえされる。資本制は、そのかぎりでは自己制作的な過程そのものとなる。すなわち、一箇のオートポイエーシス機構となるのである。／資本の、このオートポイエーティック・メカニズムを十全に分析するためには、とはいえ、資本制のその後の展開を問題とするほうがより適切だろう。すなわちレーニン——その『帝国主義論』は、ドイツでは総数の百分の一にも満たない企業がエネルギーの四分之三を独占し、合衆国では、おなじく百分の一の企業に、一国の総生産のほとんど半分が由来している段階を見すえていた——以後の資本制の変容と、その現在とを問うことが必要となるはずである。」 703P

「マルクスはさらに、理論が民衆を掴むのは、それがラディカルになるときであるとして、「ラディカルであるとは、ことがらをその根において把握することである。人間にとっての根とはしかし人間それ自身である」と書きとめていた。」 708P

「若きマルクスは自問して、自答していた。「現世の神とはなにか？ 貨幣である」（「ユダヤ人問題によせて」）地上の批判の核心は貨幣に或る。より一般的にいうなら、エコノミーの批判にあるのである。エコノミーのうちにこそ宗教がある。そのかぎりでは、宗教批判はいまだ終了してはいないのだ。」 708P

「商品が価値であるのはまさにフェティシズムであり、地上の批判は天上の批判をふくまなければならない。その意味で、宗教の批判がいっさいの批判の前提なのである。」 710P

「ひとえに、三位一体範式そのものをマルクスは「日常生活の宗教」と見なしていたことである。『資本論』が、その末尾で、キリスト教信仰の核心（三位一体論）に言及するのは、だんじて偶然ではない／ただし、資本制生産様式が支配して、資本が生を榨どっている世界、この「魔法にかけられ、顛倒と移調され、逆立ちした」世界における、魔法と顛倒は、いわゆる三位一体範式にのみ見てとられるものではない。それは、私たちが本書の最終章で問題としたように、資本制の超越論的審級を制約する信用制度のうちにこそ、いっそう現在のなしかたで見てとるべきものなのだ。」 711P

「その信（信用制度もしくは信用システムを裏うちする信）、とはいえ不断に揺らぐ。信は、ここでいわば「超越論的仮象」であるからだ。「危機」はそこで「原理的に不可避」である。「他なる社会の可能性」を問うためには、それゆえマルクスが読まれなければならない。資本制が不断に危機をうちにふくみ、その危機を暴力的に解除することでたえず再生するリヴァイアサンであるしだいをみとめるならば、「マルクスを読まないこと、読みなおさないこと」は「つねに過失」となるはずなのである。」 713P

切り抜きをとりつつ、この著のもつ意味はもっと深いものがあると改めて感じていました。再読を期したいと思っています。

たわしの読書メモ・・・ブログ 438

・熊野純彦『マルクス資本論の哲学』岩波書店(岩波新書) 2018

前のブログの同じ著者の新書展開。普通新書版は、分かりやすくなっているのです

が、簡潔にまとめられているとはいえ、熊野さんは哲学をトータルにとらえ返した希有のひと、哲学を縦糸に経済学（批判）を横糸にして織りなした著書です。新書なので、『資本論』と哲学とマルクスがだいたい頭に入っているひとには、是非読んでおいて欲しいと思うのですが、廣松さんのことまで頭に入っていないと、むずかしいかもしれません。前のブログの著書とリンクしていくと、意義深いと思います。

で、今回は検索的に、キーワード的なメモにしておきます。

二つの革命 i P・・・なぜ1948と1968なのか？ パリコミュンとロシア革命の位置づけは？

この本の目的 「ちいさな者たちへの視線」 iii-iv P・・・「小さき・・・」は学者的視線、当事者意識をくぐらせて、さらに学的に展開すること

「かのようにあらわれる」「しかし、じっさいは」 4P・・・als

「あらわれる」「現象する」－「である」ではない 5P

「可能性としての商品」と「商品でなくなったもの」 8P

アリストテレス「運動しているもの」 9P

「商品は、商品となる運動としてだけあり、商品へと生成してゆく途上にのみ存在する」

9P

「使用価値としての商品は商品学の素材であって、経済学の対象ではない」 10P

「価値の「現象形態」」 15P

同じものの交換は「交換は無意味であるか、不可能」 16P

「“蒸留”して残るもの」——「抽象的人間労働」 17P

「価値とは「幽霊のような対象性」」 19P

「感覚的に超感覚的事物」——「形而上学小理屈や、神学的つぶやきに満ちたもの」 20P

「非対称性」 24P

「回り道」 25P

「取りちがえ」——「関係のなかでこそ、価値が生成する」 26P

「移される」——「映される」 27P

「単純な価値形態そのものが、拡大された価値形態の一項」 29P・・・関係論

「同等のものとして妥当する労働として呈示されている」 30P・・・ここにも als

「差異をふくんだ反復」 33P

第二形態から第三形態の移行－「偶然性と不確定性、運動と揺らぎ」 33P

「逆向きにも読まれなければならない」 39P

「貨幣がその謎を隠蔽する」 41P

「古典的経済学が想定する労働一般（抽象的人間労働）が一箇の形而上学にはかならない」 41・2P

「有用労働」が「他者たちにとって有用なかたちで支出されている」かどうか、「証明することができるのは交換だけ」です。」 42P

「ことがらはむしろ逆」「かれらはそれと知らずに、それをおこなう」「それぞれの労働生産物を一箇の社会的象形文字とする。」 42・3P

「私的労働のさまざま」が、交換によって実現される諸関係によって「はじめてじっさ



いに社会的総労働の諸環として実証される」。商品がフェティッシュであるというとき、その「謎のような性格」が生まれるのは「あきらかに〔商品という〕この形態そのものから」です。交換により等値される「人間自身の労働の社会的性格」が、「労働生産物そのものの対象的性格」に置きかえられる、かくて「感覺的超感覺的事物」、つまり価値をもつ商品という倒錯が誕生します。」・・・『資本論』第1章商品論の末尾の節「商品のフェティッシュの性格とその秘密」43P

「関係が現実に存在する場合、関係は私に対して存在する」わけですがけれども、関係そのものは私の意識を超えてひろがっています。」44P

「存在とは、個人については意識の背後にひろがる無意識の水準を抜くものですが、資本制にかんしていえば、にわかには見とおしえないその構造を指示します。『資本論』全体の課題を暗示しているのです。」・・・「経済学批判」序言の唯物史観の定式44P

「マルクスがみとめるフェティッシュ的性格は、だから貨幣にかぎられず、むしろ第一には商品そのものにみとめられていました。」46-7P

「貨幣の止揚は、他者の「未来への行為への有意味的な関係」をふくむ、つまり他者もまた貨幣を受け取るであろうという「期待」が貨幣の使用を可能にする、と答えればよい。」→機能主義アプローチにつながる「貨幣とは象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディアである。」47P

「神に劣らず貨幣についても「形而上学小理屈」があらわれてきます。」49P

「ライオン、トラ、ウサギ等々のそばを動物そのものが歩いている！ この奇妙な光景が、一般的等価形態（第三形態）の、つまりやがて貨幣形態（第四形態）の成立する現場なのです。」50P

「プラトニズム」「アリストテレコ＝トニズム」51P

「ミダス王」52P

「貨幣とは「一般的な売春」であり、「諸関係を解体する者」である。」54P

「商品交換は対称的過程であるかにみえる、とはいえほんとうは、そこに存在しているのは非対称的關係です。」55P

「商品流通は「たえず貨幣を発汗している」」59P

商品－流通、貨幣－通流 60P

「やがてことがらが顛倒して映じてきます。商品を流通させる手段にすぎないはずの貨幣が目的と化してゆく。「貨幣蓄蔵」のはじまりです。」62P

「貨幣として金に、その黄金色の栄光が変換される。それは奴隷から主人となる。たんなる手伝いから、諸商品の神となる」わけです。」63P

「貨幣蓄蔵者は、さらにその禁欲主義が精力的な勤勉とむすびついているかぎり、宗教上は本質的にプロテスタントであって、さらにはピューリタンである」（『経済学批判』）

「貨幣とはイスラエルの嫉妬深い神であり、そのまえでは他のいかなる神も存続をゆるされない」（「ユダヤ人問題によせて」）64P

「貨幣蓄蔵は過ぎ去った時間の蓄積であるのに対し、信用貨幣は未だ到来しない時間の凍結です。そこでは未来が過去のかわりになって、両者が置きかえられてゆく。そこに資本が登場する条件のひとつが準備されているわけです。」67P・・・資本主義の登場ではな

い、信用貨幣は資本主義の只中から出てくる

「支払い手段としての貨幣」——「媒介されない矛盾」 68P

「商品流通が一般化したところではじめて近代的意味での資本がなりたつ。資本は「現象形態」としてはまず、商品流通から生まれる貨幣としてあらわれる」 70P

「価値はかくてまた「それが価値であるがゆえに価値を生む」という、「オカルト的な質」を受け取ることになるのです。資本のフェティシズムのはじまりにほかなりません。」 72P

「ここがロドスだ、ここで跳べ！」 77P

「ベルグソンはカントのうちに、時間を空間化する典型的な傾向をみとめていました。けれどもカントもまた空間性に対する時間の優位をある意味で承認します。」「私たちの認識はすべて最終的には時間にしたがう」 79P

「よりリスクの高い源泉は空間的な差異の存在です。」「この空間的差異の利用は、時間を条件とし、時間のなかで空間的差異を横断しながら、それを消去するものです。」「商品交換そのものが共同体と共同体のあいだで発生したのとおなじように、あいことなるふたつの流通圏の差異、つまり流通圏と流通圏とのあいだからとりわけ商人資本が生成している。」 80P

「空間的差異と時間的差異」 81P

「産業資本が剰余価値を獲得するのも、実は空間的な差異と時間的差異を利用することによってであり、あるいは積極的にこのふたつの差異を創出することをつうじてです。」

82P・・・労働と労働力の差異

「時間的に分離」 85P・・・労働力と労働

「協業は一方では時間的な差異を空間的に並列して、他方では空間的な差異を時間的に統合します。」 94P

「機械もまた、人間を幸福にするものではありません。フロイトのことばをもじっていえば、資本制による世界創造の計画のうちに、人間の幸福はふくまれていないのです。」100P

フーコー107P

「空間の配置（貨幣資本、生産資本、商品資本の併存）は時間的作用（資本の運動）の成果にほかならない。だからまた「継続の停滞は、どのようなものであれ並列を攪乱することになる。」 118P

「資本もかくて事物ではなく運動であり、たえず更新される生成にほかなりません。」 120P

「アリストテレスは、運動するものはいつでも可能性において存在しつつ、可能性のなかに存在することだけが現実的なありかたである。資本はその意味で運動し、不断にあらたに生成することで資本であり、みずから増殖してゆく」 121P・・・可能態と現実態、運動としての資本

「時間によって空間を絶滅する」「経済とは最終的に「時間のエコノミー」に帰着する」 129P

「運輸機関の発達と同時に、空間的速度は高められて、かくしてと空間的な距離が時間的に短縮される」 130P

「こうして資本は「神の手からやってきたかのように、世界のなかを、それがじぶんの

ために育てあげられた庭園であるかのごとくに闊歩する」 132P

「かつての「科学的社会主義」とも「マルクス経済学」とも距離をとってマルクスの思考とりわけ『資本論』の哲学を問題としてきたつもりです。」 135P

「生産過程が科学の応用となるなら、逆に科学は生産過程の一要因、いうなればそのひとつの函数となる。」 136P

「資本制生産様式という特殊歴史的な与件と科学＝技術との密接なかかわりを読みとろうとする姿勢であって、前者に対するマルクスの立場が批判的なものであることの函数として、後者にかんするその視点も無批判的なものではありません」 137P

「マルクスがみずから引きうけた課題は経済学をさらに発展させることではない。批判的な経済学を構築することでもない。ひとえに経済学批判を展開することでした。」 142P

「科学とはなにか」——「ここでは特定の歴史的・社会的な布置関係を反映した、世界のとらえかたというくらいの意味で使っておきます。」「マルクスにとっては経済科学がイデオロギーなのです。」 143P

「資本元本は（資本による）生産と（資本家による）消費の反復によって減額してゆき、やがては消失するはずです。」 149P→次項「単純再生産の前提との脆弱性」・・・「永久機関はありえない」の問題とリンク

「現在主流の経済学では資本主義という語も資本制ということばも使用されず「市場経済」という表現が好まれますけれども、これはすでにひとつのイデオロギーです。「いっさいの国々の生産と消費を全世界的なものとする」（『コミニスト党宣言』）資本制の歴史を、自然過程として肯定するイデオロギーであり、グローバルゼーションという現在を自然状態とみなして、支配を正統化する世界像なのです。」 155P・・・まさに物象化されたイデオロギー、マルクス葬送のなかで多くの学者が「市場経済はなくなる」という論理にからめとられている現実

「「分析者の立場」と「当事者の立場」」 172P・・・ヘーゲル弁証法から活かされているマルクス－廣松の弁証法の概念

「顛倒された観念、移調された意識」「じぶん自身に対する関係としての資本」「そこでは、「資本と労働」ではなく「資本と資本」が相対し、現実のいっさいが「競争」のなかに置かれることになるはずです。」 176-7P

「近代科学の因果性の概念」 187P

「『資本論』はそのつど、それぞれの分析カテゴリーが倒錯と神秘化とをふくんでいるしだいを指摘していた」「そこで問題になるものは分析者の立場から当事者の立場への転換なのです。廣松渉以来の物象化論的なマルクス解釈が強調してきたところにほかなりません。」 188P

「マルクスにとってはこの経済科学こそがイデオロギーだったのです。」 188P

「商業資本は産業資本に寄生しているとは言えますけれども、以上のかぎりにおいてそのありかたはむしろ、生物学でいう相利共生にもあたります。」 196P

「高利資本は商人資本とならんで「その双子の兄弟」です。それは「資本の大洪水以前の形態」でもあります。」 204P

「マルクスはホラティウスを引いて、土地所有者を「果実を消費するために生まれてき

た者と呼んでいました。」 205P

「そこでは（利子生み資本では）貨幣そのものが商品となり、資本それ自体が商品となる。資本制の神秘化過程が、時間のフェティシズムとむすびあって、資本制にとって最後のフェティッシュをうみだすことになるわけです。」 207P

「時—間がここでは物神（フェティッシュ・・ルビ）となります。利子生み資本を正当化するものは、時間に対する物神崇拝（フェティシズム・・・ルビ）であることになるでしょう。」「時間という目にみえないもの、あるいは未来という不在の形式にすぎません。」

211P

「端的に時間的差異を利用する利子生み資本は、その非合理においてなおもっとも純粋な資本なのです。」 212P

「顛倒と物象化」 214P

「スコットランド啓蒙」 216P

「信用制度を問題にすることは、一方では資本制を進展させてきた基本的な機構を捉えなおすことです。他方でそれは資本制の内部に埋めこまれ、その作動を保証する安全装置を同時に資本制の危機をもたらす起爆装置として問いかえすはこびにつながることでしょう。」 217P

「信用制度は他面で「もっとも純粋で、もっとも巨大な賭博システムと詐欺システムまで発展してゆくこと」が可能です。」 228P

「資本制とはたしかに、完成された商品——貨幣経済です。資本制経済と呼ぶかわりに「市場経済」と称することは或る意味でただしい。もういちど繰り返しておくならば、そう呼称することは、けれども一箇のイデオロギーであって、市場システムの無法な支配を正当化する世界像にほかなりません。」 238-9P

「わが亡きあとに洪水は来たれ！これがあらゆる資本家、すべての資本制国家の合い言葉なのだ」 239P

「資本制と自然のあいだに、マルクスは最終的には両立不可能性を見てとっていた可能性があり、・・・」 240P

「『資本論』は、商品という一見したところごくありふれたものが、じつのところ謎に満ちたありかたを伴っているしだいから考察を開始し、資本の生成と運動を見とどけて、その総過程を問題とする地点まで到達してきました。本書では、マルクスのその思考のみちゆきを、価値形態論を形而上学批判として読みなおすところからはじめて、資本の運動を時間と空間の再編過程ととらえるところみを経て、科学批判としての資本論体系をきわだたせながら、利子生み資本と信用制度のうちに時間のフェティシズムを見さだめる地点まで辿りついたところですよ。」 242P・・・この著の道行き—概略

「連合」にアソシエーションのルビ 244P

「権利とはある意味でただのフィクションですけれど、必要もしくは欠落は、だれにとっても不可避な、実在する制約です。たんなる交換（とりわけ商品交換）原理では、この欠落を原理的に補填することができません。」 253P

コミュニン主義の第一段階と第二段階（『ゴータ綱領批判』から） 253-9P

「権利とはかならず排除をふくむ、力に対抗する力にほかならないからです。あるいは、

特定の資格を承認された者たちに賦与される、一定でいど排他的な力こそが権利であるからです。ここでは平均以上の労働能力こそ、それに当たることになるでしょう。」258P・・・  
労働能力に対する差別は人権の範疇に入らない

「私たちの生そのものが贈与に支えられて可能になっている」——「純粋な贈与」・・・  
モースの『贈与論』では、私有財産制の成立下で、純粋な贈与はありえないとなっている、  
ただし、そもそも原理的には「純粋な贈与」で成り立つべきこと

## 映像鑑賞メモ

たわしの映像鑑賞メモ 024

### ・代島治彦監督「三里塚のイカロス」2017

イカロスとはギリシャ神話の中に出てくる、幽閉されていたところから翼をつけて飛び出したものの、太陽に近づきすぎて死んだという話。

三里塚闘争に支援で入ったひとたちの思いを中心に空港公団で切り崩しを担当した職員  
の思いも描いた作品です。

援農から農家に結婚して入った女性、その連れ合いの反対同盟のひと、元農民運動家、  
強制執行に反対する闘争で穴掘りをやっていた落盤にあい「下半身不随」になったひと、  
管制塔占拠闘争を闘ったひと、中核派の三里塚の責任者で政治局員までいき党派を離脱し  
たひと、それぞれの人生をかけた取り組みで、そのなかで交差する思いということが、伝  
わってきます。あの時代の熱気と、反対同盟が切り崩されていった、そしてそういうなか  
で支援の党派の対立的になってしまった他党派ヘテロなどの運動の行き詰まりをとらえら  
れます。そこにひとつの運動の総括が今、問われていて、問題点が浮かびあがってきます。

新左翼運動の総括から、国際「共産主義運動」総括にまで及ぶ、総括の核心のようなこ  
とを、この映画を見ながら考えていました。まずは、武力闘争、これについては以前総括  
のようなことを書いているので、そちらも参照にして欲しいのですが、安易な暴力の行使  
に対しては批判しつつも、右翼の襲撃や、ファシストとの暴力的せめぎ合いでどうするか  
という問題に関して、非暴力主義ではありえないのですが、蜂起ということが必要になる  
かどうかは別にして、クラウゼビッツ戦争論の蜂起の一回性ということにおいて、プロパ  
ガンダとしての武力行使は認められないのではないかということ、わたしの総括の方向  
性を出そうとしています。

この映画のなかで、反対同盟の分裂や、そもそも当事者をさておいたセクト主義的な支  
援の動き、三里塚闘争を階級闘争の集中点とした方針の誤りと、政治利用主義への批判、  
そこにはレーニン主義的な党建設論の批判と総括、まさにパルタイ、セクト主義的な、組  
織の物象化ということとして総括が必要になっているのではないかと思います。

「共産主義的運動」とは、その運動がその運動が目ざす未来社会の関係性を、その運動  
が示している活動としてあることで、そのことに照らし、政治主義的活動の検証が必要に  
なると思うのです。

## (編集後記)

◆少し遅れてしまいました。あまりにもひどい政治情況に、なぜこんな酷い情況がまだ容認されるかのようになっているのか、どうしても分からないのです。社会は変わらないという風潮に支配されているところに根源的な問題があるのだと改めて思うのです。社会を変えようとした運動の総括がなされないままになっている、そのことから立て直さないと、という思いを抱きながら、情況を読み解く作業をしているなかでの遅延です。

◆「巻頭言」は、いろんな対話をするなかで、書いた文、このあたり、反障害原論への断章的補足、断片的になっているのを、もう少しまとめてみようと思っています。

◆「情況へのコメント」は、どうしてこんなに、明々白々なごまかしの政治にだまされなければならないのか、と怒りを乗り越えた、あ然たる思いを抱きつつ、色んな思いが交錯していきます。いっそのこと、このままアベ政権が続いていけば、自民党そのものを完膚なきまでに叩いていけるのではないかとか、でも、却って、政治への絶望がもっとひどい政治情況をうみだすのではないかとか、色んな思いの中で、とにかく、わたしたちのできることは、きちんと、うそとごまかしの政治を暴いていくことだと思います。そしてなによりも、「社会が変わらない」という観念が流布していることへの、これまでの運動のきちんとした総括のなかから、展望をだしていくしかないのです。

◆「読書メモ」は、ひさしぶりにマルクスに帰っていました。リード本文にも書きましたが、今後の学習計画を練り直す必要を感じています。メモの中で、「マルクスの経済学」と書いたところは、現在的には「経済学批判」と押さえ直すところです。

今回、通信の発刊が遅れた理由のひとつは、全日ろう連の機関紙に、手話言語法に関する論文が載り、手話はひとつという、言語論的に考えて理解できない文を読み、そこからその論文の源流的な高田英一さんの本『手話からみた言語の起源』文理閣、を読んでいたこともあったのです。これに関しては、もう読み終えているのですが、発刊が遅れ分量も多くなったので次回に回しました。

◆「映像鑑賞メモ」は、三里塚闘争の総括というところで大切なドキュメント映像です。それぞれの活動と生があり、色んな思いが交錯していくのだと思います。そして新左翼党派が入れ込んだところでの、新左翼運動総体の総括として、いろいろな総括すべき問題が浮かび上がってきます。この映画のなかに出てくるひとたちとは、わたしは三里塚は大きな集会の時に参加していただけで出会っていませんが、三里塚の中核派の責任者の岸宏一さんとはわたしが本を出版したときに、丁度「図書新聞」で働いておられて出会っています。彼が、三里塚と対革マル戦とを負の総括としてなさんとしているその思いと言うことを映画のなかで語っていました。同じく中核派の政治局員だった水谷保孝さんとの共著『革共同政治局の敗北 1975～2014 あるいは中核派の崩壊』があります。そこには、事実関係をまず語っていくというところで、出されているのですが、総括としては未完です。わたしも政治党派活動を担った経験はあるのですが、わたしは末端の活動、まさに中核として担ったひとの総括の作業が求められているのだと思います

党派の活動を現役で担っているひとは、組織の物神化にとらわれてしまいます。そこか

ら抜け出した総括というところで期待していたのですが、映画を観ていて、その総括の重さということを感じていました。彼は、登山中に行方不明になり、その死が推測されています。政治党派的も遠いところにいたひと、そして中枢と末端という位相の違いもあるのですが、わたしは反差別というところから切り込んでいく立場があるので、彼だけでない、この映画にも出てくる、死せる者の思いを引き継いで、総括の作業の一端を担っていきたいと思っています。死せるひとたちへ、合掌。

◆次回は、今回の分を補填して発刊を少し早めたいと思っています。

## 反障害－反差別研究会

### ■ 会の方針

「障害とは何か」というところでの議論の混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げています。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この会でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成のためにあります。会としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていきました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返しなが、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会をかえようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としなが議論していきたいと考えていきます。

### ■連絡先

Eメール [hiro3.ads@ac.auone-net.jp](mailto:hiro3.ads@ac.auone-net.jp)

HPアドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧

<http://www.taica.info/kh.html>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>